藤田寛之　福田正博　川内優輝　**仁志敏久**　大神雄子

3/3 日報

スポートピア

自ら考え動く 木内野球

茨城の"名将"は師であり父である。木内幸男元常総学院野球部監督。この人との出会いが私の全てである。甲子園の成績は取手二高、常総学院合わせて40勝19敗。優勝は春1回夏2回。

木内マジックといわれた采配と茨城なまりで飾らない発言は高校野球ファンにとどまらず、広く世間を魅了した。

とにかく堂々とはっきりとものを言う人だ。おとなしいヤツは嫌いだし、ダメなヤツはダメだと言う。しかし、それらの言葉には必ず意味があり、できない人間をただ排除するための言葉ではない。

私が入学した1987年の春、常総学院は学校創立5年目で、甲子園初出場を果たした。初戦で敗退したものの、木内野球が再び全国の舞台に戻ってきた。その夏、甲子園準優勝。「木内常総」はあっという間に全国区となった。

新入生の私を監督は抜てきした。甲子園に出たばかりのチームで1年生を使う発想も木内監督ならでは。先輩たちはさぞかし面白くないのではと思ったが、その先輩たちが監督の考え方を常に教えてくれて、比較的早く木内野球を理解することができていた。

当時の常総学院では、次打者は前の打者がスリーボールとなったり、またはヒットを打って出塁したりした場合、打席に入る前に監督のもとへ行き「どうしますか?」と、指示をあおぐ決まりだった。事前にどんな作戦があり得るのかを聞いておけば、サインを見て焦ることがないからなのだが、いざサインが出ても、ただその通りに実行すればいいわけではない。

例えばバントのサインでも、きついバントシフトを敷かれたらバスター（バントの構えから強打）に切り替える臨機応変さが要求される。

夏の甲子園3回戦。剛腕、伊良部秀輝投手を擁する香川・尽誠学園との試合で、私の前の打者が出塁した。監督のもとへ行くと「エンドランがあるから、頭に入れとけ」。

しかし、まだ1年生の私に150キロ近いスピードボールを確実に転がして安打を狙うのは難しかった。でもバスターならいけると思い、すかさず「バスターエンドランでもいいですか?」と返すと「よし分かった」と監督。エンドランは見事成功となった。

決勝戦（対PL学園）の最終回。無死一塁で私に回ってきた。打席中、セーフティーバントのサインが出たが、ここでも考えた。三塁に転がしてのバントヒットは難しい状況、と私はみた。ならば右方向へのプッシュバントだと思い、これも成功。

これが木内野球の神髄だ。選手が監督の指示だけを実行するのでなく、状況に応じて臨機応変に展開していく考え方を持つこと。采配で動くのみでなく、勝手に機能していく選手をつくる。指導者になった今、私が目指すものもそこにある。奥が深い木内野球に私はいまだに魅了されているのだと思う。（野球解説者）

藤田寛之　福田正博　川内優輝　仁志敏久　大神雄子

スポートピア

バスケの未来 同志と議論

世界で4億5千万人の競技者を抱えるバスケットボールの総本山はスイス・ジュネーブに隣接したミーという小さな村にある。2月下旬、国際連盟（FIBA）の選手委員として各大陸選出のメンバーとの最初の会議に出席するため、このFIBA本部を初めて訪れた。

委員長は米プロNBAの元スター選手、ダーク・ノビツキー氏。私が現役時代に対戦したこともあるオーストラリアの元代表選手や東京五輪で初採用される3人制の現役男子選手ら男女各8人の委員の経歴は多彩だが、バスケットを取り巻く環境を良くしたいと考える同志ばかりだ。

FIBA側からは昨秋の男子ワールドカップの報告のほか、私たちの任期となる2023年までに女性の指導者や審判を増やしたいといった目標が示された。こうした提案を選手目線で受け止め、建設的な意見をフィードバックするのが役割になる。

選手委員に選ばれた日本人は初めてで、今のメンバーではアジア代表も私1人だけだから、地域を取り巻く現状や課題も含めて責任ある発言が求められる。それは裏返せば、選手委員会での議題を日本協会やWリーグに伝える役目も任されたということ。185㌢もの英文資料を事前に読み、1日で多くの議事をこなすタイトな日程だったが、予定の時間を大きく超えて白熱した議論が続いた。

ひときわ盛り上がったのはユース大会の運営を巡る話し合いだ。FIBAは近年、年代別の世界大会の宿泊先にアスリートラウンジを設け、トップ選手が将来のビジョンを講演したり、参加チームが交流したりする機会をつくっている。教育やモチベーションの向上が長い目で見ればバスケットの発展につながるという狙いなのだろう。

この発案自体はとても有意義だと賛同しつつ、私は中高生のうちから結果を求めがちな日本の現状が頭に浮かんだ。「英語の問題もあり、日本は積極的に参加しないかもしれない」。そんな感想を漏らしたら、ロシア出身の女性委員も「私たちの国も以前はそうだった」と言う。協会や指導者が「育成」と「強化」の境界線をどう考えるかは世界共通の課題なのだろう。国や地域を背負っての真剣勝負も大切だが、若者がバスケットを通して成長できる場を提供する大切さを痛感した。

会議では将来のルール改正に向けて意見を求められる場面があり、3人制の議論にも多くの時間が割かれた。FIBAがこの新種目に大きな可能性を感じていることがうかがえた。「新しいものを作っていこう」と力強くあいさつしたノビツキー氏をはじめ、委員はみな意欲に満ちている。世界の潮流を肌で感じられる貴重な機会を生かし、日本のバスケット界に少しでも還元できればと考えている。

（バスケットボール女子日本代表元主将）